

IAEEと過ごした14年

片山 恒雄

副会長

独立行政法人

防災科学技術研究所

理事長

昨年(2002年)5月に、14年間つとめた国際地震工学会(IAEE)の事務局長を、京大の家村浩和先生に交替していただいた。1988年に東京と京都で開かれた第9回世界地震工学会議のときに、前任の大沢胖先生(東大・地震研究所)から引き継いだときは、まさかこんなに長い間つとめることになろうとは、思いもしなかった。

事務局長は、事務局が置かれた国から選ばれることになっており、1963年にIAEEが発足して以来、事務局が日本に置かれているので、ずっと日本人が事務局長をつとめている。初代の南和夫先生(早大・建築学科)は1963年から1977年までの14年間、そして2代目の大沢先生が1988年までの11年間をつとめられた。1988年、大沢先生は、体調を崩されており、お元気であれば、もっと長くつとめられてもおかしくはなかった。私が3代目ということになるのだが、こうやって比べてみて、異常に長かったわけでもないことに初めて気が付いた。

世界地震工学会議の思い出

世界地震工学会議(WCEE)は4年に1回開催される。1956年に、

バークレーで小規模な国際会議が開かれた。1906年にサンフランシスコを襲った大地震から半世紀の地震工学の発展を見つめようという会議であった。せいぜい50人ほどの参加者の会議だったが、世界中の地震工学の専門家が一堂に会した最初の機会であり、このような会議を定期的で開催したらどうだろうということになったようだ。そこで、4年後の1960年に日本で2回目を開催したところ、これが大成功し、世界地震工学会議が定着した。3回目以降は、ニュージーランド、チリ、イタリア、インド、トルコ、アメリカ、日本、スペイン、メキシコ、ニュージーランドと4年ごとの会議が続いている。2000年にニュージーランドで開かれた第12回会議を含め、ここ5回の会議には2千人を超える参加者があった。2004年の第13回会議はカナダのバンクーバーで開催される。

私が世界地震工学会議に出席したのは、1965年初頭にニュージーランドで開催された第3回が最初である。その前年の3月から、シドニーのニューサウスウェールズ大学でティーチング・フェローをやっていて、ニュージーランドはお隣の国だった。当時、シドニーで一緒に家を借りていたマイケル・コリンズ(現トロント大学教授)がニュージーランドに戻って結婚式を挙げるというので、あと二人の同

居人と会議の1週間も前にニュージーランドに行き、サウスアイランド(南島)を一回りし、マイケルの結婚式に出席した後で、オークランドの会議に出席した。論文を投稿していたわけではなかったが、初めての国際会議参加だったこともあり、いまでも思い出に残っている。この会議は、前半をオークランド、後半はウェリントンで開催されたが、参加者は、ノースアイランド(北島)をバスで縦断した。バスの数は10台よりは少なかったように思うから、参加者の数もせいぜい300人というところだったろう。日本からは30人くらいの先生が来られたが、地震工学の専門家がそんなに多数で外国の学会に参加したのはじめての機会だったと思う。英語の国に住んで10ヶ月ほど経っており、生活や習慣にも慣れたと思っていたから、自信満々だった。「君は生意気だ」と言われた先生もおられたが、事実、そうとう生意気に見えたはずだ。

第4回WCEEが南米のチリで開かれたときには、日本に帰っていたが、これには出席していない。3年強のシドニー暮らしの後で、中央大学で講師の職についたばかりだったから、参加できなくて、当たり前と思っていた。

第5回WCEE(1972年)の開催地は、ローマだった。私は東大・生産技術研究所に移っていたが、久保慶三郎先生が、私と佐藤暢彦さんを参加させてくださった。論文を出したかどうか覚えていない。ローマでは、旅行案内書に書いてあるとおりの手口で高いお酒を飲まされた。佐藤さんと二人でバーに連れ込まれ、(と言うより、喜んで付いて行き、)ポンポンとシャンパンを抜かれて、有り金を巻き上

げられた。会議の後で、佐藤さんとヨーロッパをあちこち旅行した。ローマからウィーン、ミュンヘン、インスブルック、チューリッヒ、ベルン、パリ、アムステルダムと、まさにおのぼりさん旅行だったが、楽しかった。その頃は、次の海外出張はしばらくは無いものと思っていたが、実際には、この前後から、日本は右肩上がりの発展を続けはじめ、海外に行くことは珍しくなくなった。

第6回WCEEはインドのニューデリー、第7回はトルコのイスタンブールで開催された。トルコの会議は月曜日にはじまったと思う。金曜日の朝、いつも朝早くから雑踏だったホテルの外がやけに静かだった。木曜日の夜中に、軍によるクーデターが起きていたのである。日本を出発するときから、政治的に不安定だということは聞いていたが、着いてみたイスタンブールは、街の角角に兵隊さんが立っていて、むしろこんなに安全なところはないと考えはじめていたのだから、脳天気と言われてもしかたがない。イスラム教の休日は金曜日なので、クーデターは木曜の夜に起きることが多いのだそうだ。

第8回会議は、サンフランシスコで開催された。私は、研究室の大学院生などを含んで10人を超えるグループをつくって参加していた。何回かの日米共同研究や日米セミナーの日本側の事務方をつとめたし、いくつもの米国での学会に出席していたから、アメリカの先生方には知り合いも多くなっていた。この会議の特別講演で、フランク・プレスが、20世紀最後の10年を、世界中の国々が協力して自然災害の被害を軽減する10年にしようと提案した。これが、「国

際防災の 10 年(IDNDR)」として実現するのだが、当時の私は、後になって、個人的に深く巻き込まれることになろうとは予想もせず、カリフォルニアの青空を満喫していた。第 9 回 WCEE は、1988 年に日本で開かれることになった。

会議に出なかった 4 回の会議

国際会議に出るということは、ふつう、研究発表のセッションに参加することを意味する。しかし、第 9 回の東京・京都の WCEE からの 4 回の会議は、私にとって、自分の発表以外のセッションにはほとんど参加しない国際会議となった。

まず日本で開催した第 9 回 WCEE では、開催国の研究者として、裏方の仕事が忙しかったし、大沢先生がご病気だったので、IAEE の理事会や総会を実質的に切り盛りすることになった。京都で行われた閉会式で事務局長として初めて挨拶したが、それ以降、マドリッド、アカプルコ、オークランドと、3 回にわたって事務局長として挨拶することになった。

IAEE の事務局が日本にあることは、前に述べたが、その仕事がいちばん忙しいのは、4 年に 1 回の WCEE の時である。最近の WCEE は、月曜にはじまって金曜に終わるのがふつうであるが、IAEE 事務局としては、その間に最低 2 回の理事会と、加盟国代表の全体会議である総会を開かねばならない。

理事会はたいてい火曜日に開催するのだが、必要に応じて水曜

日にも開くことがある。実際、オークランドでは、2 日にわたって理事会を開かなければならなかった。全体会議は、IAEE の最高決定機関であり、役員の決定、次の WCEE 開催国の決定などは、すべて総会で行われる。WCEE の開催が近づくと、総会開催の日程、検討する事項などを加盟国に知らせ、個々の加盟国の出欠を問い合わせる。ところが、この問い合わせに対する回答がなかなか集まらないのである。だから、WCEE の開催地に行ってまずやらなければならないことは、どの加盟国が来ているかの確認である。もちろん、どの理事が来ているかの確認も必要である。WCEE のときには、IAEE 事務局の部屋を準備してもらう。理事会、総会の予定は前々から知らせてあるにもかかわらず、理事や国の代表が予定を聞きにひっきりなしにやってくる。次期開催国の立候補国、新しい役員の候補は理事会で準備しておくのだが、最終的には総会での投票で決められる。特に、次期開催国については、会議のだいぶ前から受付けているにもかかわらず、多くの場合、正式な申し出は、WCEE のために加盟国が集まってきてからである。このことは、事務局長にとっては、実に気になることなのだ。もし、WCEE の間に次期開催地が決まらない場合には、会議後に事務局長の責任で決めなければならない。これまで、幸いにも、そのような状況になったことはなかったが、「もし立候補国がなかったら」は、事務局長にとって悪夢にも近い。

金曜日に会議が終了した後、前日の総会で決まった新しい役員と旧役員の合同の理事会を開く。要するに、WCEE 開催の 5 日間、毎日のように、IAEE の会議、そのための準備や打ち合わせが続く

のだ。おかげで大きな顔ができるようになった。

日本地震工学会の理事会で、家村先生に事務局長の交替をお願いしたとき、ある理事が、「片山さんでもできたんだから」と言ってくれたが、これは、まさに事実である。

事務局長は大変な仕事とされているようだが、それほどでもないことを白状しておこう。WCEE の最中は忙しいし、WCEE が近づくと忙しくなるのだが、残りの期間は、ぐーたらにやればやれなくもない。そして、私は、ぐーたらにやったから 14 年間も続けられたと言えよう。

4 年おきの WCEE の間にも、郵便による投票で決めなければならないことも少なくない。しかし、加盟国代表の返事はなかなか来ないのである。たいがいの事案の決定に必要な過半数の回答が集まるのに、数ヶ月かかることも珍しくない。相手が適当にしかやらないなら、こっちも適当にやろう、と考えると気が楽になる。14 年も国際学会の事務局長をやっていて良かったことは、世界の研究者仲間の中で大きな顔ができるようになったことだろうか。どの国の代表的な研究者とも「おまえ」「おれ」で話せるようになった。と言っても、英語では同じ言葉を使うことにちがいはない。ただ、雰囲気として、「おまえ」「おれ」の感じというわけだ。

1992 年、スペインのマドリッドで WCEE が開かれたときのことだ。チト一大統領が死んで、ユーゴスラビアはいくつかの小さな国に分かれた。これらの独立した国が別々に IAEE の会員となることを申請してきた。マケドニアもその一つであった。ところが、マケドニアとい

う名前は歴史的にギリシャの一部だと言って、ギリシャの代表が猛烈に抗議してきた。マケドニアの方も負けてはいない。顔をくつつきそうなほど近づけてきて、文句を言ってくる。「落ち着け、悪いようにはしないから」と言えたのは、まさに、「おまえ」「おれ」の付き合いがあったからである。結局、ギリシャの代表を口説き落として、マケドニアを入会させることができたし、そのときやり合ったギリシャの代表とは、それまで以上に仲の良い友人になった。

長い間つとめたわりには、大したことをしていないというのが、正直なところである。14 年間に、3 人の会長と一緒に仕事をした。グラントリー会長(イタリア)、ポーレー会長(ニュージーランド)、チェリー会長(カナダ)の 3 人である。人柄も仕事の仕方も、それぞれちがったが、どの会長もすばらしい方々で、楽しく一緒に仕事をさせていただいた。私よりも活動的な事務局長が付いていたら、もっといろいろなことができていただろう、と思うと申し訳ない気がする。

その中で、多少お役に立ったかな、と思えることを書いておこう。

まずは、台湾の IAEE 加盟である。1976 年の唐山地震を契機として、中国は地震工学の研究や地震防災に国を挙げて力を注ぎだし、IAEE においてもきわめて活発な発言を行う国の一つとなっていた。一方、台湾の地震工学研究のレベルの高さも、多くの国際会議を通して知られていた。国際会議では、中国の研究者と台湾の研究者が同席することも珍しくなかったが、問題は、「一つの中国」という、政治的なものであった。研究者同士には大きな確執はなかったと、私は考えている。台湾を正式にどう呼ぶかが、残された問題となり、

これを解決するのに長い時間がかかった。確か、“China,Taipei”ということで落ち着いたと思う。「確か」とは無責任な、と思われるかもしれないが、加盟してからは、台湾という呼び名が問題なく使われているのである。ただし、加盟後最初の総会のときは少し緊張した。総会の席順はアルファベット順であり、正式の呼び名を使えば、台湾は中国の隣りになる。しかし、事務局としては、台湾（Taiwan）という場所に席を置いてもらうのが自然だと思った。この場合、T ではじまる国のところが席となるので、中国とはずっと離れることになる。これに気づいて、中国が何か言ってこないかと恐れたのだが、結果的には何も起きなかった。

先に述べた、サンフランシスコでのプレスの提案は、国連で採択され、「国際防災の 10 年 (IDNDR)」が、1990 年にスタートした。プレスの最初の提案を聞いた地震工学研究者にとって、IDNDR をサポートすることは、ある種の義務と思われた。そこで、少し遅れはしたが、1993 年に発足させたのが、世界地震安全推進機構 (WSSI) である。以来、このボランティア活動にどっぷりと浸かって、早 10 年である。IAEE の事務局としての大切な活動は、基本的に 4 年毎の WCEE の場で行われる。WSSI は「国際防災の 10 年」の活動を、IAEE の立場から支援するためにつくられた機構であるが、結果的には、かなりの独立性を持って自由に動く機構になった。これが、ボランティア・グループの良いところであるが、IAEE の理事の中には、反感を示された人もおられた。その後、WSSI は、シンガポールで非営利会社(わが国の NPO に近い)として法人化した。理事の個人

的な持ち出しによるボランティア・グループの性質は基本的に変わっていない。私個人としては、WSSI の活動は、IAEE の活動の延長と考えている。

貧乏な団体ではあるが、WSSI は、地震工学の未発達国・途上国での活動を続けている。その代表的な活動が、ハイ・レベル・ミーティング (HLM) の開催である。開催国の関係者が、その国で会うべきハイ・レベルな人たちとの面談の手配や、エンジニア・研究者を対象にした講演会の準備をする。WSSI 関係者は、そこへ自費で参加して、地震防災の大切さを訴え、地震工学の基本について講演したりするのである。これまで、アジア地域を中心に 8 カ国で HLM を開催してきた。人口が爆発的に増加しているアジアの都市地域では、地震危険度が高くなっている。それにもかかわらず、IAEE へのアジア諸国の参加は少ない。

すべてが HLM の成果とは言えないが、この 14 年間に、アジア地域から、韓国、ミャンマー、ネパール、パキスタン、シンガポール、台湾、タイの 7 カ国が IAEE に加盟した。また、アフリカ大陸から、ウガンダが加盟したことも画期的と言える。ウガンダで開いた HLM には、大統領が出席して、熱のこもった長時間の挨拶をした。

私が事務局長を務めた 14 年間は、ソ連、ユーゴスラビアなどの旧体制が崩壊し、東西ドイツが一つになるという、世界的に激動の時代であった。事務局長になった直後の IAEE 加盟国は 38 だったが、いまは 54 カ国になった。

やったことは少ないが、やり残したことは少なくない。その中でも

最大の事案は、加盟国から会費を徴収しようという件である。何度も出ては消えたこの事案に、家村事務局長が積極的に取り組んで下さっている。

14 年間事務局長をやって感じるのは、結局、人と人の関係が大切だということである。いくら頑張っても、乗り越えられない言葉のハンデがある。これは、仕方がない。ともかく、堂々とやること、それに、ユーモアのセンスがあれば十分である。そのかわり、話をしなければならぬときには、時間が許すかぎり準備する。最近では、若い研究者でも国際会議に出席する機会が多くなっているが、ほとんど準備もせずに発表する人の度胸に感心すると同時に、もう少し真面目にやれと言いたくなることも少なくない。

この 14 年間、わが国の地震工学の関係者には、本当にお世話になった。たくさんの方々が後ろに付いていただいていることをいつも感じられたからこそ、続けられたと思う。特に、建築研究振興協会の太田三香子さんには、どんなに感謝してもしきれないほどのご助力をいただいた。太田さん無しで、この 14 年間は語れない。IAEE は、私無しでも何とかあったが、太田さん無しではどうにもならなかった。IAEE 事務局長を交替していただいて、ほっとする間もなく、2003 年から、よんどころない事情で、先に述べた WSSI の会長をやることになった。WSSI については、別の機会にもっと詳しく説明したいと思うが、地震工学の国際協力の場からは、まだしばらく離れられそうもない。
(2003 年 2 月 20 日)